突然来た津波。流されていく自分の家。津波は地元の方々の生活の場をことごとく潰していったに違いありません。

昼食後は草刈りをすることになりました。でも僕はあまりに頭が混乱していたので、海の方を見て一度落ち着こうとしました。海を見つめると、そこは何とも穏やかでした。その海が、その穏やかな海が、地震による津波とはいえ人を襲うなんて、とても考えられませんでした。しかし、今作業をしている所はまぎれもなく津波の被害があった場所です。テレビで見ていた以上に被害は深刻だと思いました。

次の日も同じ作業でしたが、被災された方の直接の依頼で、私と関西中央高校の方と、先生方２人とで草刈りを引き受けさせていただきました。

正直、この日でもう終わりっていうのはかなり辛かったです。すべての作業が終わってもなぜか悔いが残っていました。僕たちの力はあまりにも小さく、できることなら２日間だけでなくもっと長い間お手伝いさせてもらいたかったからです。

それでも一つ、とても良かったと思えることがありました。それは、被災された方の声を直接聞けたことです。僕が作業させていただいたお家の方は、１人暮らしの６０歳の女性でした。その方は、津波が来たときの様子や怖い思いをされたことを泣きながら話してくださり、また、「遠いところから来てくれてありがとう。」と言ってくださいました。初めて会ったばかりの見ず知らずの僕たちにまで辛い心の内を打ち明けてくださったことを、とてもうれしく思いました。

この２日間のボランティア活動に参加させていただけたことに、僕は言葉では言い表せないくらい感謝をしています。行かせていただく前と後の自分は大きく変わりました。この経験は僕を成長させてくれ、本当に良い経験になりました。この経験を生かし、これからも自分が何か人の役に立てることがあればやっていきたい、と思っています。

皆さま本当にお疲れ様でした。そして、ありがとうございました！

東日本大震災被災地支援ボランティアに参加して

奈良市立一条高等学校　２年　中澤　毬恵

私は今回、東日本大震災被災地支援ボランティアに参加させていただきました。３月１１日に東北大震災が起こってから、私も何かの役に立ちたいと常々思っていたので、学校からボランティア募集の知らせを聞き、喜んで友達と２人で参加しようと思いました。正直なことを言うと、放射能汚染や蠅の大量発生など様々な不安はありました。しかし、現地で生活しておられる方々はもっと大きな不安を抱えていると思うと、その不安や苦しみを他人事として受けとめるのは、同じ日本に住んでいる人間としていけないと思い、ボランティアに参加することを決断しました。

１５時間バスに乗って現地に到着しました。１日目のボランティア活動は、被災地の高校生や日本の各地からボランティアをしに来ている大学生たちと一緒に、津波でほとんどの建物がなくなってしまった地区を模型で復元したり、実際に津波によって大きな被害を受けたまちを車で見学したりしました。私は最初に、模型に色をつけました。模型にはたくさんの家があり、その家々には家主さんの名前などが書かれた旗が立てられていました。私はこの模型を見て、こんなにもたくさんの家が流されてしまったのだと改めて思い知りました。

昼食の時、現地の女子高生が５人いましたが、最初はなかなか声をかけられませんでした。でも、こんな機会はもうないので、少しでも話がしたいと思い、思い切って話しかけました。こちらから震災のことを聞くのはとても気が引けて、方言の違いや、服はどこで買うのかなどの、他愛のない話しかできませんでした。しかし、そんな他愛のない話の中でも、服を買いに行くのに、線路が流されてしまってバスでしか行けないとか、学校も流されてしまったなどの話が自然と出てきて、やっぱり震

災が生活に大きく影響しているのだと思いました。

模型の製作の次に、雨の中、津波の被害にあったまちを車で案内していただきました。海のそばのほとんどの建物が、一階部分が廃墟のようになってしまっていました。海の近くに下りていくと、海面のあまりの高さにとても驚きました。地盤沈下で住宅の前の道路が海につかっていたのです。車で走っている道路のすぐ横が、その道路とほぼ同じ高さの海面でした。海の中にはとても大きなクレーンが何台もあったり、雨の中だというのに警備員さんがたくさんいたりして、ガレキ撤去が進み、着実に復興に向かっているなと感じました。

２日目は、児童館に行って小学生の子供達と触れあいました。子供達はみんな人懐こくて、人見知りもせず、初めから私達と仲良く接してくれました。外ではおにごっこやだるまさんころんだなど、室内ではお絵かきやハンカチ落としをしたり、宿題をみてあげたりして、本当に色々な遊びをしました。

遊んでいる最中、震度５程度の地震が起こりました。宮城県沿岸部には一時的に津波警報が発令されました。私は普段、地震に遭うことがめったにないので少し動揺しました。しかし、子供達は落ち着いた様子で、「地震だ。」と口々につぶやいて、児童館の運動場の真ん中に集まってきました。そして、全員しゃがんで地震がおさまるのを待ちました。その間、隣にいた女の子が、「私のお兄ちゃんの友達の家族がみんな流されちゃったんだよ。この前お墓参りに行って、お菓子をお供えしてきたよ。」と、思い出したように私に話しました。私は何と言って良いかわからず、相づちだけをうっていました。その子だけでなく、他の子供達も、東日本大震災が起こった日のことを話しているようでした。こうして頻繁に地震が起きるたびに、子供達が震災の日を思い出しているのだと思うと、とても辛い気持ちになりました。

子供達はみんな、無邪気でとても可愛い笑顔を、始終私達に見せてくれました。しかし、後で児童館の先生に聞いた話では、一緒に遊んでいた子供の中には、親を亡くした子供もいたとのことでした。私はそれを聞いて、本当に胸が張り裂けるほどつらかったです。児童館に遊びに来ていた子供も、そうでない子供も、大人の人も、被災地に住む人のほとんどが、親類や友達や知り合いの、少なくともいずれかの人をなくしているのだそうです。私は、あんなにも可愛らしい笑顔を見せてくれた子供達が、家族や友達を失ったなんて、考えるだけでも辛く、できれば深く考えたくないとまで思ってしまいます。でも、私が触れたくないと思えば顔を背けられるその事実を背負う当事者である人達は、どんなに顔を背けたいと思っても、思い出したくないと思っても、その事実を真正面から受けとめて生きていかなければならないのです。私は、そんな人達にとって、何の役に立つことも出来ないと思います。ですが、被災された方々の思いを、顔を背けることなく、同じように真正面から受けとめる事が、今の私に出来る唯一のことだと思うし、一番大切なことでもあると思います。

私は今回、このボランティアに参加して、被災された方々の本当に辛い部分を知ることができたと思っています。日本に住む全ての人が、決して他人事ととらえずに、共に歩んでいこうという気持ちを持ち続けることが何よりの支援になると思います。

「東日本大震災被災地支援」に関するボランティア活動に参加して

大和高田市立高田商業高等学校　３年　下曽山　潤

私は、８月１７日から２０日まで東日本大震災被災地支援ボランティアに参加し、岩手県陸前高田市でボランティア活動をさせていただきました。テレビや新聞などで津波の被害にあった陸前高田市の映像や写真などを多く見ていましたが、実際に現地へ行き見るのとでは、今まで自分が思っていた思いや印象は大きく変わりました。

特に印象に残っているのは、津波によって家や車、木など、なにもかもが流され、壊され、それら財産ががれきとなって積み上げられている光景です。そこには、多くの家族との思い出の品や大切な

ものがたくさんあり、また未だ帰ってきていない家族や友人、知り合いが見つかっておらず、がれきの中や土の中に埋もれていると思うと、胸がつぶされるような気持ちになりました。病院や小学校など、大きな建物は窓やドアが無くなり、筒抜けの状態になっていて、津波の恐さを感じました。私たちがボランティア活動した場所の森の中で車が横転していたり、１０メートル以上の高さの木の枝に服やタオルが引っ掛かっていたり、すべてをのみ込んだ津波の恐ろしさを肌で感じました。

ボランティア活動だけでなく、他校の生徒とボランティアや災害などについて、これからどうしていくべきかなど、それぞれの意見を言い合い、話し合うことができました。話し合いの中で、助け合うということはとても大事なことで、人は助け合いながら生きていかなければならないということを再確認することができました。知り合って間もない相手に、自分の思いをぶつけるというのは、なかなかできることではないし、とてもいい経験になったと思います。また、自分の意見を言うということは大事なことだと感じました。

現地での活動だけでなく、現地の方との会話やふれあいをもっとしたいと思いました。私は、実際に現地へと行き、ボランティア活動として支援するのは初めてのことでした。実際に見たり、聞いたりすると、今までの自分とは何か違う思いが出てきました。そして、意識も変わり、少しでも人の役に立ちたい、また、今、自分ができることを精一杯しなければならないと思いました。

そして、このボランティア活動を通して感じたことや、見たことを多くの人たちに伝えていきたいです。また、これから先もこの震災のことを忘れてはいけないし、今のこの気持ちや、感じていることも忘れてはいけないことだと思いました。最後に、このボランティア活動に関わった先生方やバスの運転手さん、たくさんの方に感謝したいと思います。

今、すべきこと

奈良女子大学附属中等教育学校　５年　木村蘭子

８月２１日から８月２４日の間に被災地へのボランティアという非常に貴重な体験をさせて頂いた。その間に思ったこと・感じたことは簡単には言い表せないものがたくさんあった。

ひびの入った建物、高く積まれたガレキ、海水が未だに残る海辺…。そういった普段の日常では決して見ることのない景色が目に飛び込んできた。ニュースでそういった悲惨な映像を見ていたので自分の中で「東北で地震があって大きな被害を受けた」ということは理解していたつもりだった。しかし、実際に見るのとメディアを通して見るのは違った。生でみて初めて私は「私が今立っているこの地で本当に地震が起きた」ということを実感した。自分は離れた奈良でのんきに生活していたものだとショックも受けた。十分な生活ができていない人々がいる傍ら普通の生活を無意識でしている私たちは無神経だったと思わされた。質素な生活をするまでしなくてももう少し自分たちの生活の有り様について意識をしないといけないのではないかと今さらながら考えた。

被災地で見たものは全部が悪いショックを受けるものではなかった。プレハブではあるが auショップ・ファミリーマート・お弁当屋さん・などの生活する上で必要な店はもう営業していた。また現地の人の手書きと思われる字で「復興の湯」という言葉が書かれている看板のある銭湯や自然に咲いていたひまわりなどが私に明るい未来をイメージさせた。それらを見て人や自然の「力強さ」を改めて感じることができた。

ボランティアから帰ってきてからは少し自分の毎日の生活への態度に変化があった気がする。具体的にここがどう変化したという事は言えないが気持ちの面で確実に何かが変わった。その小さな変化が、被災地の方々に何らかに影響があるとは思わないが、自分自身の中で大きなものといえる。自分が今すべきことは毎日を全力で精一杯生きることだと思う。そうすれば私の“全力”や“精一杯”が、いつか被災地の方々のところへ届くだろうから。私はそう考えたい。

東日本大震災ボランティアに参加して

関西中央高等学校　２年　仲川　隆行

３月１１日午後２時４６分、宮城県沖を震源とするマグニチュード９．０の地震が発生し、大津波が町を襲いました。

たくさんの人々が犠牲になり、難を逃れた人たちは５ヶ月を過ぎた今も避難生活を強いられており、原発による避難のため自宅を離れている人々もたくさんいます。

私の兄は、地震が起こる１時間前に仙台市内にある会社の営業所を仕事で訪れており、その帰路、福島県内で被災しました。幸い怪我はなく、無事でしたが、走っていた高速道路は通行止めで一般道に下りたものの、渋滞で動けず、埼玉にある会社に丸一日かけて戻りました。

父は会社の営業所の従業員やその家族を心配し、地震の翌日にマイクロバスを運転し仙台に向かいました。残された私たちは、「危ないから行かないで欲しい。」と思いながらも、口に出してはいけないと「気をつけて行ってきてや。」と送り出しました。

父や兄が遭遇した現地での出来事は、テレビや新聞の報道より痛々しく、もし自分の家族がそんな状況になったらと考えると胸が苦しかったです。

何か自分にできることはないだろうか。そう考えていた時に、このボランティアの募集を知りました。私は迷うことなく応募しました。祖父母は危険だからと反対しましたが、父や兄が体験した被災地で私も何か手助けをしたかったから、反対を押し切り参加しました。

岩手県陸前高田市まで、バスで１４時間の距離はきつかったです。こんなことで弱音を吐いている場合ではないのですが、初日は本当にきつかったです。雨の中、草刈りや掃除をしました。雨のせいか、気温も低く寒かったです。

２日目は、家の中にあったであろう品々を拾いました。カセットやＣＤ、フィルム、被災した人たちの思い出の品かもしれないので、バケツの中に大切に拾って行きました。

被災した人の家にも入らせて頂きました。２階まで津波の入った跡がまざまざと残る家の中は背筋が寒くなりました。辺りを見渡しても、建物がないところに、電信柱だけがポツリポツリと立っていて、聞くとそこは、津波が来る前は、住宅地だったそうです。

自然の前で、人間はなんと小さい生き物なのかと考えました。でも、その小さな生き物が、みんなで力を合わせれば、大きなものになるはずだとも考えました。

被災地の人たちは、自分たちが大変な境遇にあるにもかかわらず、私たちボランティアの身体を気遣ってくださいました。これ以上誰にも痛い思いや苦しい思い、悲しい思いをして欲しくないからだそうです。

以前のような故郷を取り戻し、被災した人たちが穏やかに生活できるようになるのは、まだまだ時間がかかると思います。でも、地震や津波はいつ、どこで起こってもおかしくありません。自分や家族が被災するかもしれません。時間は戻せないけど、故郷や生活は取り戻せるはずです。これからも自分のできることで引き続き支援をしていきたいと強く感じました。